

On the cultural guises of cognitive dissonance: The case of Easterners and Westerners.

Hoshino-Browne, E., Zanna, A. S., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Kitayama, S., and Lackenbauer, S. (2005) On the cultural guises of cognitive dissonance: The case of Easterners and Westerners. *Journal of Personality and Social Psychology*. 89(3), 294-310.

Rep. 小森めぐみ¹.

ABSTRACT

認知的不協和と不協和低減の際の自己肯定化の影響が交差文化的に検討された。実験1、実験2ではヨーロッパ系カナダ人が自分のための選択をより正当化するのに対し、アジア系カナダ人(研究1)や日本人(研究2)は友人のための選択をより正当化することが示された。研究3では、アジア系カナダ人では相互依存的な自己肯定が不協和を低減するが、ヨーロッパ系カナダ人ではそうならないことが示された。研究4では友人のために選択を行うアジア系カナダ人のうち、二文化をもつアジア系カナダ人では依存的な自己高揚が不協和を低減するのに対し、単一文化をもつアジア系カナダ人ではその傾向が見られないことが示された。これらの結果は東洋人も西洋人も不協和を経験するが、不協和が喚起・低減される文脈は文化が形作ることを示している。これらの文化差が認知不協和や自己肯定の理論に対してもつ意義が議論された。

はじめに

- ・ 日常生活は選択の連続。人々は自分のためだけではなく、人に代わって選択する場合もある
 - たとえば息子の洋服を決める母親、娘の婿を選ぶ父親
- ・ Festinger(1957)によれば、選択肢の重要性にかかわらず、ふたつの魅力的な選択肢がある場合、人は認知的不協和を経験し、自分の選択を正当化する傾向がある(e. g., Berehm, 1956; Heine & Lehman, 1997; Steele, Spencer & Lynch, 1993)
- ・ 本研究では認知的不協和を自己イメージ維持プロセスの一部として概念化し(Spencer, Josephs, & Steele, 1993; Steele et al., 1993)、人々がもつ自己概念に見られる文化の多様性に注目する(Heine, Lehman, Markus, & Kitayama, 1999; Markus & Kitayama, 1991; Triandis, 1989, 1996)
- ・ 自己肯定化理論(Steele, 1988; see also Spencer et al., 1993)によれば、人々は自分が最適ではない(less-than-optimal)選択を下した可能性がある場合、自己概念への脅威や認知的不協和を感じる。
- ・ self-construal や self-view はその人の文化がもつ理想(ideal)に応じて異なるため、この認知的不協和と自己イメージ維持のプロセスには文化の多様性が見られると考えられる。

本研究で検討すること

- ・ 文化の違いにかかわらず、人は自己概念に脅威を覚えると認知的不協和を経験する
- ・ しかし、不協和低減は、各文化が取り入れている自己概念の特徴に応じて異なる

Culturally ideal self-concepts, cognitive dissonance, and self-affirmation

(文化によって異なる理想の自己概念、認知的不協和、自己肯定化)

- ・ 個人主義的な西洋文化と集団主義的な東洋アジア文化における自己概念の文化差研究はここ数十年で蓄積されている(e. g., Heine et al., 1999; Markus & Kitayama, 1991; Triandis, 1989, 1996)

¹ 一橋大学大学院博士課程.

- ・ 西洋における理想的な自己概念は、合理的かつユニークで独立していること。非合理または他人の影響を受けた選択は自己概念にとって脅威となるため、認知的不協和を低減するために選択が正当化される
- ・ 一方、東洋における理想的な自己概念は、内集団メンバーとの円滑で調和的な関係がとれていること。他の内集団メンバーにとって最適でない判断は、他者との良好な関係維持にとって脅威となるため、認知的不協和を低減するために選択が正当化される
- ・ 自己肯定理論(Steele, 1988)によると、人は自分の品位を維持するよう動機づけられている。ネガティブな出来事によって自己の信念が脅威を受けた場合、自分は別の次元で優れていると考えて自己イメージを維持する。この理論は主に北アメリカで検討されたが、このプロセス・理論は文化の違いを越えてあてはまると考えられる。
- ・ 理想の自己イメージは文化によって異なるため、効果的な自己高揚方略も文化により異なることが予想される。
 - 西洋では自己のユニークさや目立ちやすさを強調するかたちで自己高揚が行われる
 - 東洋では他者とのつながりや所属を強調するかたちで自己高揚が行われる
- ・ 文化的に価値づけられた自己が脅威にさらされ、認知的不協和が高まった場合、効果的な自己イメージ維持方略は文化的にふさわしい方法でおこなわれる

Past research on cognitive dissonance from cross-cultural perspectives

(比較文化の観点からとらえる過去の認知的不協和研究)

- ・ Heine and Lehman(1997)は略式自由選択法(conventional free-choice paradigm)を使用して、不協和低減に見られる文化差を検討した。
 - CDのマーケティングリサーチというカバーストーリーの元でカナダと日本を比較
 - カナダ人は、不協和を低減するために、自分のCD選択を正当化した。別次元(パーソナリティテスト)でポジティブフィードバックを得た場合には、それによって自己高揚が行われたので、選択を正当化しなかった。
 - 日本人は、自分のCD選択の正当化を行わず、別次元での自己高揚の機会も意味をもたなかった。
- ・ Heine and Lehman(1997)では、日本人が選択を正当化しなかったのは、東洋人がこのパラダイムでは不協和を感じなかったからだという説明を行った。自己にとって不適当な選択を下すことは、独立的自己観をもつ場合には脅威だが、協調的自己感をもつ場合には脅威とならない
- ・ 一方、承諾誘発パラダイム(induced compliance paradigm)を用いたSakai(1981; Sakai & Andow, 1980)では、矛盾する結果が見られている。
 - 日本人の高校生を対象として、自己紹介の後/匿名の下で反態度的なスピーチをさせた場合、人前でスピーチをした条件のほうが、不協和を低減していた(態度が変化していた)。
 - Sakai(1981)は結果を不協和低減から説明
- ・ 二つの研究の違いは、使用パラダイムの違いではなく、脅威を受けた自己の側面という観点からも説明が可能。
 - Sakai(1981)では、自己紹介後条件の参加者は対人的な不安を感じて不協和低減した
 - 集団主義的な文化では内集団メンバーと良好な関係を維持することが強調される。自分が文化的な理想水準に達していないかもしれないという不安は、認知的不協和のもととなる。
 - Sakai(1981)では、自己紹介をすることが他者との意見の不一致や聞き手からの孤立の危険

性の認識につながり、不安が高まった。この不安の高まりが態度変化につながったと缶 g なえられる

- ・本研究では、4つの研究で東洋人と西洋人が不協和を経験した後に決定を正当化し、脅威をうけた自己の品位を回復させるべく自己高揚を行う状況を検討する。
- ・本研究で文化的な自己概念が脅威を受け、認知的不協和や自己高揚プロセスを発動させるのかを検討する

Unconventional free-choice paradigm

(略式自由選択パラダイム)

- ・本研究では、東洋人でも不協和を感じるような状況設定として、伝統的な略式自由選択パラダイムに friend 条件（参加者が仲良しの友人の好みをもとに製品の評価を行い、プレゼントとして選択する）を追加。
 - 東洋人にとって、親密な内集団メンバーの好みや望みを知ることは、対人関係の維持につながるため重要
 - 他者のための選択を失敗することは、相手の気分を害して対人関係にヒビをいれるだけでなく、選択した本人に無力感を引き起こす。
 - このような場合、自己概念は脅威をうけ、不協和が生起する。
- ・本研究では中華料理の選択を題材に用いた
 - 大学生にとっては魅力的でリアルな題材。
 - 東洋では、内集団の重要メンバーの食べ物の好みを知ることは非常に重要 (Markus & Kitayama, 1991; Heine & Lehman, 1997)
- ・本研究では、参加者は自分のため/親友のために中華料理の前菜に順位をつけ、評定した後、無料ランチチケットを選択した。

Study 1: Postdecisional justification among European Canadians and Asian Canadians

(研究1：ヨーロッパ系カナダ人とアジア系カナダ人に見られる決定後の正当化)

- ・上述の自由選択パラダイムを用いて、文化的な理想自己の概念（西洋→相互独立的、東洋→相互協調的）が、不協和を感じ、それを低減しようとする状況とどのように組み合わせられるかが検討された。
- ・ヨーロッパ系カナダ人の参加者が自己のための選択を行う場合には、選択の失敗は理想自己への脅威になるため、従来のような不協和生起、不協和低減が見られると考えられる。
- ・ヨーロッパ系カナダ人参加者が友人のための選択を行う場合の結果は予測不能
 - Norton et al (2003)では、西洋人でも内集団メンバーの不協和を低減する
 - 理想的な自己概念の文化差を考慮すると、西洋人はアジア人ほどには不協和を低減しないと考えられる
- ・アジア系カナダ人は、友人のために選択を行う場合に不協和生起、不協和低減が見られると考えられる。選択の失敗が理想自己への脅威となるため。
- ・生活環境の違いなどを考慮すると、アジア系カナダ人のアイデンティフィケーションの程度は人によって異なることが予想される。そして、同一化の程度が高いほど、相互協調的な理想自己が保持されているために、友人のための選択でより強く不協和を感じ、それを低減することが予測

される

方法

- ・ 大規模な教場試験の際にリクルート
- ・ 実験者の指示に従わなかった or カバーストーリーを信じなかった 8 名は除外
- ・ アジア人としてのアイデンティティがないと答えた 2 名は除外
- ・ 116 名 (男 47 女 69) のうち、カナダ生まれのヨーロッパ系カナダ人は 64 (男 27 女性 37) 名で、東アジア生まれのアジア系カナダ人は 52 (男 20 女 32) 名。
- ・ 性別の効果はどの研究でも見られなかったため、意向では扱わない。
- ・ アジア系カナダ人の平均滞在年数は 7.5 年 (標準偏差は 4.6 年)

手続

- ・ アジア文化、カナダ文化への同一化 (identification)
- ・ 教場試験の際に、アジア系カナダ人は (a) どちらの文化に同一化していると思うか (b) その文化にどの程度同一化していると思うか (1 1 件法)
- ・ 除外前の参加者の回答の分散は大きく (範囲 2~10、平均 8.41)、中央値 9 で分割を行って、アジア文化への同一化が高い参加者を選択した。
- ・ アジア文化への同一化とカナダでの滞在期間は相関し ($r(91) = -.31$ 、カナダへの滞在期間が長いほど、アジア文化に同一化していなかった。
- ・ 教場試験の際に、カナダ文化への同一化の程度も 1 1 件法で測定した。カナダ文化への同一化の程度はアジア文化への同一化の程度とマイナス相関をしめし ($r(91) = -.21$)、カナダでの滞在期間と正の相関を示した ($r(91) = .40$, $p < .001$)。

素材と自由選択パラダイム

- ・ 参加者は個別で実験に参加
- ・ 実験は大学側の協力のもとで行われている “現実場面における意思決定の研究” であり、近日オープンする中華料理のレストランのメニュー評価をしてもらうものと告げられた。
- ・ 友人条件では、これまでの研究では友人のために選択をしてもらうとより正確になるということが告げられ、食べ物の好みを知っているくらいの親友を思い浮かべてその人のために選ぶよう求められた。
- ・ 自己条件では、上記のような追加教示はなかった。
- ・ 【time1 測定】次に参加者は、25 種類の料理ののったメニューから、10 種類を自分/友人のために選んだ。その後、選んだ 10 の料理を好きな順に並べ、それぞれを 7 件法で評定した (高得点ほど好き)。
- ・ デモグラフィック要因を記述した後、参加者は 5 番目と 6 番目に好きだと答えた料理のチケットを見せられ、自分/友人のために一枚を選び、チケットに名前を書いた。(自分だけ/自分+友人)
- ・ 【time2 測定】その後 10 分間、実験者は実験室を離れて参加者とチケットを放置し、その後 25 種類の料理に付いての値段を含むより詳細なメニューをもってきて、事前に自分が選んだ 10 の料理について、もう一度評定を行った。
- ・ 実験は昼食時を避けて行われたほか、参加者の空腹の程度が 4 件法で尋ねられた。友人条件では、参加者と友人の関係が尋ねられたほか、友人との近さが 5 件法で尋ねられた。また、チケットがどのようにして友人に届くかを推測させた。
- ・ 疑念が尋ねられた後、ディブリーフィングが行われた。
- ・ 実験デザインは 2 (文化: ヨーロッパ系カナダ人 vs. アジア系カナダ人) \times 2 (選択のターゲット)

ト：自己 vs. 友人) の被験者間計画。

Results

- ・ time1 の 9 件法の回答は 7 件法に変換され、time2 との比較が可能になった。
- ・ 選択された料理への好意度の増加と、選択されなかった料理への好意度の減少が検討された。
- ・ 従属測度に対して、2 (文化) × 2 (ターゲット) の分散分析が行われた。
- ・ 文化の主効果($F(1, 112)=0.25, ns.$)もターゲットの主効果($F(1, 112)=0.38, ns.$)も有意でなかったが、交互作用が有意だった($F(1, 112)=4.35, p<.05$, 図 1 参照)
 - 自己条件のヨーロッパ系カナダ人はアジア系カナダ人よりも選択のばらつきが大きくなっていた($F(1, 112)=3.22, p=.07$)。
 - 友人条件のヨーロッパ系カナダ人は、自己条件のヨーロッパ系カナダ人や友人条件のアジア系カナダ人よりもばらつきが小さかったが、有意ではなかった($F(1, 112)=1.22, ns.$)。
 - 友人条件では、ヨーロッパ系とアジア系カナダ人の差は有意ではなかった($F(1, 112)=1.33, ns.$)。
- ・ また、1 サンプルの t 検定を行って、ばらつきの大きさが 0 より有意に大きいかを検討したところ (すべて両側検定)、
 - 自己条件のヨーロッパ系カナダ人 ($M=0.74, SD=1.62, t(31)=2.57$) と友人条件の同一化の高いアジア系カナダ人 ($M=0.77, SD=1.53, t(27)=2.68$) の値が 0 より有意に大きかった ($ps<.05$)。
 - 友人条件のヨーロッパ系カナダ人 ($M=0.27, SD=2.13, t(31)=2.13$) と自己条件の同一化の高いアジア系カナダ人 ($M=-0.07, SD=1.12, t(23)=0.32$) の値が 0 との差は見られなかった。
- ・ 同一化の低かったアジア系カナダ人も入れた分析を行うために、同一化を連続編量としてくみこんだ回帰分析を行った。
 - ターゲットの条件とアジア文化への同一化の程度は有意な crossover interaction を示した ($t(89)=2.74, p<.01 (\beta=.35)$)。友人条件では、アジア文化への同一化が強いほど、友人への選択を正当化した。Simple slope は有意で $\beta=.25, t(89)=2.41, p<.05$ であった。
 - 逆に、自己条件ではアジア文化への同一化が強いほど、自己への選択を正当化した。Simple slope は有意で $\beta=-.33, t(89)=2.09, p<.05$ であった。

Discussion

- ・ 実験の結果は予想通りだった。
 - ヨーロッパ系カナダ人は (アジア系カナダ人と比べて) 自分への選択のときに正当化を行いやすく、アジア系カナダ人は (ヨーロッパ系カナダ人と比べて) 友人への選択のときに正当化を行いやすかった。
- ・ 同一化の程度の低いアジア人を分析に入れたことで、自由選択パラダイムに中華料理を使用したことが、アジアプライムとして働き、アジア人にアジア人らしくふるまうよう動機づけたという代替説明を排除することができた
 - 同一化の程度の低いアジア人は、友人の為の選択を正当化しなかった
- ・ 友人の種類や近さの要因は、結果に大きな影響を与えていなかった。
- ・ 予想通りの結果が得られたものの、一部の結果は統計的な有意差にいたらなかったため、カナダと日本の参加者を用いて、実験が行われた。

Study 2: Replication of study 1 among European Canadians and Japanese

(研究2 : ヨーロッパ系カナダ人と日本人を対象とした研究1の追試)

- ・ 文化の違いにかかわらず、人は自己概念に脅威を覚えると認知的不協和を経験する

Study 3: Postdecisional Justification and self-affirmation among Asian Canadians

(研究3 : アジア系カナダ人に見られる決定後の正当化と自己肯定)

- ・ 文化の違いにかかわらず、人は自己概念に脅威を覚えると認知的不協和を経験する

Study 4: Postdecisional justification and independent self-affirmation

among bicultural and monocultural Asian Canadians

(研究4 : 二文化と単一文化のアジア系カナダ人に見られる決定後の正当化と自己肯定)

- ・ 文化の違いにかかわらず、人は自己概念に脅威を覚えると認知的不協和を経験する

General Discussion

(全体考察)

- ・ 文化の違いにかかわらず、人は自己概念に脅威を覚えると認知的不協和を経験する